

ら道を急いで芝の辨天の祠の周囲にある池へと志した。で殊に
この蓮の花は濃艶麗質を供えて居るのであつた。

蓮の花を描くのは、頗る難澁なもので、花の極佳い時は早朝で
ある、朝開く夕方に蒼むで翌日散る。葉は酷く大きい、圓青參
差として、描すのに旨くまとまりが附かないので、箇々別々に
精密な研究を要する。一陣の微風だに渡れば、其嬌艶な姿は忽
ち崩れて、全く別な形となつてしま
う。また此外に玉葉の葉のやうな碧
い色の葉の表に、空の色の變つて行
くのを反射して、雲が行くに連れて
絶えず色が變化するのである。

(つゞく)

龍動の老舗繪具屋

龍動の老舗繪具屋と云へば、那處へ行つた畫家は必ず記憶して
居るだらう。元來此の家は先祖代々の顔料の製造方を一子相傳
で傳へて居るので價は減法に高いが、他店に模倣出来ない程の
佳い品を作る、家の構造からして馬鹿に古風で、日本で云へば
本町邊りの老舗へ行つた様な氣がする。而して其商買の遣方迄

が飽迄も眞面目で、日が暮れると直ぐに戸を閉めて、夜は決し
て顔料を賣つて呉れぬ、處へ事情を知らぬ日本の畫工等がウツ
カリ夜中飛込んで行くと、主人の老爺さん忽ち目をムキ出し
て「何んだ、夜顔料を買ひに来る馬鹿な畫工があるもんか、サ
ツサツと歸つて明日又色の判別する時分來さつしやれ」とやつつ
ける相だ云々



水彩畫研究會所六月例會一等筆

右は讀賣紙上に出てゐた話であ
るがこれはロンドンのニューマ
ンといふ彩料舗で、この記事の
通り、店にはロクに品物もなく
淋しいが、彼地の大家は皆此家
の製品を使用する。繪具を製造
するに、今でも昔風に手で練る
ので、ニュートンのやうに器械
製ではない、そして畫家には定
價の三分一を割引して賣つてく
れる。

*
*
*
*
*
*
*
*